

章 各教科の取り組み

国語科

1 育成したい「思考力」

- a 論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
- b 想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで創造する力
- c 言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a 「論理的思考力」とは

ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を熟考・評価することである。例えば「もうどう犬の訓練」(東京書籍3年下)では、「『いっしょに町を歩く練習をします。』と、1か所だけ『練習』ということばが使われているが、これは訓練ではないのか。」「練習ということばには、訓練とは違った意味があるのか。」と、自分の経験と照らし合わせながら、ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

ことばとことばの関係において

文のねじれ，順序，主張と根拠の整合性等，語や文，構造の整合性について熟考・評価することである。形式論理(帰納論理，演繹論理)は，このレベルの思考に含まれる。

ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について熟考・評価することである。「森林のおくりもの」(東京書籍5年下)には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について、「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することが，このレベルでの思考である。

b 「想像力」とは

ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を経験とつなぎながら読み取ることである。「かさこじぞう」(東京書籍2年下)に「じいさまは，ぬれてつめたいじぞうさまのかたやらせなやらをなでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きつと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらかるうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を讀んだり，文脈とことばの関係を捉えたりすることである。「注文の多い料理店」(東京書籍5年下)には，「金文字 水色の戸 黄色な字 赤い字 黒い戸」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を考えたり，紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのもこの思考である。

ことばとその使用者において

ことばを根拠に，物語の主題や，書き手・話し手の意図等をつかみ，自分の考えをつくり上げていくことである。

c 「言語感覚」とは

正誤.....語の使い方や文の組み立て方について，言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

適否.....物事を適切に言い表しているか，場や相手にふさわしい表現か等，表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

美醜等...美しい・汚い，明るい・暗い，固い・柔らかい，重い・軽い等，あるいは軽快，重厚，優美，勇壮等，表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

2 「思考力」を育成するための思考様式

	論理的思考力	想像力
	「話すこと・聞くこと」「書くこと」	「読むこと」 ----- 主に 説明的な文章 主に 文学的な文章
ことばとそれが指し示す意味	<p>1年「きいてきいて」 分かりやすく説明する際、「色」「形」「大きさ」「数」「手ざわり」「音」「思ったこと」等の視点をもつ</p> <p>1年「きいてきいて」 詳しく話す際、「似たものと比べて言う」「理由を言う」</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 読む相手が分かることばを使って書く</p> <p>2年「ビーバーの大工事」 説明にあった絵を考える</p> <p>3年「出来事をつたえよう」 いつ・どこで・だれが・どんなといったことを落とさずに書く</p>	<p>1年「サラダでげんき」 どんな場面か考える時には「だれが」「どうしたのか」を見つける</p> <p>1年「サラダでげんき」 どんな順に来たかを考える時には、場面の始めに誰が来たかに目を付ける</p> <p>1年「はるのゆきだるま」 想像したことをことばとつなぐ</p> <p>5年「注文の多い料理店」 オノマトペ、色彩語から人物像を想像する</p>
ことばとことばの関係	<p>1年「どうぶつのはな」 自分が一番おもしろいと思った部分を選ぶ</p> <p>1年「どうぶつのはな」 その動きをよく見る、生き物になって動いてみる</p> <p>2年「教えてあげる、たからもの」 絵と話す内容が合っているかを考える</p> <p>2年「教えてあげる、たからもの」 絵の順番と話すことばの順が合っているかを考える</p> <p>2年「まよい犬をさがせ」 物事を説明する際には、全体から部分への順で行う</p> <p>2年「たんぼぼ」 伝えたいことに必要なことを書く</p> <p>2年「たんぼぼ」「たんぼぼのちえ」 </p>	<p>2年「かさこじぞう」 これまでの様子や気持ちと重ねて想像する</p> <p>3年「ゆうすげ村の小さな旅館」 2人の立場から物語を読み取る</p> <p>3年「木かげにごろり」 前後の場面で状況を変化させていることばに着目する</p> <p>3年「サーカスのライオン」 始まりの場面と比べて、中心人物の行動や気持ちが大きく変わる場面を見つける</p> <p>3年「サーカスのライオン」 いろいろなことばを結び付けながら気持ちを想像する</p> <p>4年「ごんぎつね」 会話や行動の変化に着目する</p> <p>5年「注文の多い料理店」 (主題読みのために)始めと終わりの人物の変化やその原因を図で表す</p>
ことばとその使用者	<p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 話題提示の部分を、共生の特徴となるような動きや生活の様子について、読み手を引きつけるように書く</p> <p>5年「自分の考えを伝えるスピーチをしよう」 主張の理由 反論の組み立てにする</p>	<p>3年「自然のかくし絵」 中心文を見付ける際には4つの関係から見ればよい <同じ関係> 中心文はまとめている方「このように」 <反対の関係> 中心文は後ろの方「しかし」「ところが」 <わけの関係> 中心文は意見の方「だから」 <別の関係> 中心文は両方「そして」「それに」</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 問いの段落・答えの段落を構成する</p> <p>4年「ヤドカリとイソギンチャク」 </p> <p>6年「言葉の意味を追って」 主張に合った根拠を挙げる 根拠はまとまりごとに挙げていく 根拠は、順番に挙げていく</p>

これらの思考様式は、実践の一部であり、全てを掲載しているものではありません。

3 国語科における言語活動

(1) 国語科の言語活動の特色

『小学校学習指導要領解説国語編』には次のように書かれている。

「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域では、日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるよう、継続的に指導することとし…（後略）…
（『小学校学習指導要領解説国語編』、4頁）

ここから国語科の言語活動の2つの特色を見取ることができる。

1点は、国語科においては言語活動を行う能力を身に付けることが目的とされていることである。これは、他教科における言語活動が、その教科のものの見方や考え方を表出したり、深めたりするための手段であることに対置される。

そしてもう1点は、この言語活動を行う能力は、国語科のみならず、日常生活において必要とされるということである。日常生活への転移・活用まで見据えた言語活動の在り方を考えなければならないのである。

(2) 言語活動の充実のために

体験や「教科のことばや表現方法」を取り入れること（反応の表出）

第2学年「元気にそだて やさいたち」実践では、自分たちが育てた野菜の成長記録を基に「野菜の成長の様子を紹介する」という言語活動を設定した。野菜を育てた体験を通すことで、子どもたちの中に「キュウリの生長を分かりやすく紹介したい。」「どうして葉っぱが重ならないように生えてくるのかを紹介したい。」と伝えたいことが生まれた。そして、そのための表現方法を見つけようと、教材文「たんぼぼ」（東京書籍）や「たんぼぼのちえ」（光村図書）の読みに向かった。この必要感をもった読みにより「『いつ』を書いたらどうだろう。」「『わけ』を伝えるにはどんな書き方をしたらいいのかな。」と多様な反応が表出されたのである。

視点を転換・拡充すること（反応の表出）

昨今は「批評読み」が盛んに行われている。例えば、説明文で例示の妥当性を吟味する活動を設定したとする。本論の例と結論とをつなぎながら、「結論でこのことを伝えたいのなら、別の例を挙げることもできるよ。」というように展開されるだろう。その際に、「では、なぜ筆者はこの例をもってきたのだろう。」と視点を自分から筆者に転換する。そうすることで、例示の新たな価値が見え、より多様な反応の表出が期待できるようになるのである。

めあてを明確にし、向かうべき方向性を想定しておくこと（集団吟味）

言語活動のめあてを明確にしておくことは、そこで育成する能力を明確にすることにつながる。例えば、「本を読んで推薦の文章を書く」という言語活動の中で、「その本のあらすじを書こう」という具体的なめあてを立てたとする。そうすることで、推薦したい本からどんな情報を取り出せばよいか、集団吟味が行われ、「『いつ・どこで・だれが・どうした』に着目すればいいんだな。」「大きな事件については必ず書かなければいけないな。」と考え方がまとめられていくのである。

着眼点を焦点化すること（集団吟味）

国語科における着眼点は「ことば」である。課題を解決するためにどのことばに目を付ければよいかを判断する力が大切になる。前頁に示した思考様式では、「会話や行動」「写真」「オノマトペ」など、思考の手がかりとなる着眼点を示している。学習においては、これら既習の思考様式の中から適切なものを選んで活用する場を設定することで、着眼点の焦点化が図られ、それらのことばにこだわった集団吟味が活性化するのであろう。